岩手医科大学報

Iwate Medical University News

2013・9　vol.444

●発行者―理事長・学長　小川 彰　●題字―大堀 勉

現場に急行するドクターヘリ

〈写真提供：岩手県高度救命救急センター（関連記事：P３）〉

おもな内容

●― 巻　頭　言　キャリア支援センター長就任ご挨拶　キャリア支援センター長　上原　至雅

●― 特　　集　ドクターヘリ運航開始から一年を迎えて　岩手県高度救命救急センター長　遠藤　重厚

●― トピックス　株式会社エフエム岩手と災害時等緊急放送の協力に関する協定を締結しました

●― フリーページ　すこやかスポット歯学講座№13　「歯周病の全身への影響について」　歯科保存学講座歯周療法学分野　助教　村井　治

巻　頭　言

キャリア支援センター長
就任ご挨拶

キャリア支援センター長　上原　至雅

本年４月より、前任の西郡秀夫教授からキャリア支援センター長を引き継ぐことになりました。医学部教授２名（平英一、谷田達男）、歯学部教授２名（武田泰典、藤村朗）、薬学部教授３名（大橋綾子、小澤正吾、三部篤）、高橋勝雄顧問、渡辺剛事務室長、細川栄子、高橋恵事務員らとともに運営して参りますのでよろしくお願いいたします。

さて、本年３月には薬学部第一期生が卒業し、はじめての国家試験も好成績を残してくれました。本学の歴史に新しい１ページを刻んでくれた一期生に拍手を送りたいと思います。また、就職状況ですが極めて順調と言えます。国試に失敗した学生を除き、それぞれが希望の職に就くことができました。６年制への移行期間の２年間、卒業生が輩出されなかったという特殊な事情はあるものの、医療環境が大きく変化し、薬剤師の職域の拡大もあり、ここしばらくは慢性的な薬剤師不足が続くと予想されます。

キャリア支援センターでは、学生の社会的自立に向けた実践的な能力形成と就職活動等を支援するための活動を行っています。自主性を育み意欲を引き出すためにも、確かな基礎力と高い倫理観を身につけてもらいたいと願っています。理系の学生を採用する企業が最も重視する要素は、（1）コミュニケーション能力、（2）主体性、（3）チャレンジ精神、この３つが順位不動のものだそうです。そのためにも、学生には早い時期から将来の就職を意識しながら、勉学だけでなく、クラブ活動にもバイトにも遊びにも積極的に取り組み、活動的な学生生活を送ってもらうよう指導していくつもりです。学生一人ひとりが納得のいく就職ができるよう、きめ細かなキャリアデザイン（人生設計）を支援して参ります。

最後になりますが、岩手医科大学には圭陵会という同窓会組織が全国各地にあり、いずれの地域でも卒業生を温かく迎えています。「医療人たる前に誠の人間たれ」という建学の精神は１万人を超える卒業生に脈々と受け継がれています。卒業生が全国各地で活躍し高い社会的評価を受けることができるようキャリア形成をきめ細かく支援して参りますので、ご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

特集 ドクターヘリ運航開始から一年を迎えて

岩手県高度救命救急センター長　遠藤　重厚

平成24年５月８日に岩手県ドクターヘリが本稼動運航してから約１年５ヶ月が経過しました。

関係者のご協力により開始から順調に稼働しており、事故も無く安全に運航されております。広い県土をカバーする現場救急のみならず、転院搬送においては、搬送依頼元病院のドクターやナースが搬送に付添う必要が無いため、医師不足が課題となっている本県では、一定の効果を発揮しています。

ドクターヘリの大きな役割としては「初療開始までの時間短縮」「適切な搬送先病院の選定」「搬送時間の短縮」などが挙げられます。これにより、死亡率の減少と後遺症の軽減に繋がるとされております。実際に、重症外傷による出血性ショックの症例を救命することが出来た他、心筋梗塞や脳梗塞の症例の搬送時間を短縮できたといったことを多く経験しております。

平成24年５月８日の運航開始から平成25年３月31日までの搬送患者は207人であり、その内、本学附属病院への搬送は90人（内訳は高度救命救急センター70人、循環器医療センター18人、西５Ａ病棟２人）で全体の43.5%でありました。この他は、県内の中核病院等に搬送されました。

その他の詳細につきましては、下記の実績表をご覧下さい。

●岩手県ドクターヘリの運航実績表（平成24年５月８日～平成25年３月31日、運航328日）

要請回数	運航回数	（運航回数の内訳）			不対応
		［現場救急］	［転院搬送］	［出動後キャンセル］	
306 回	256 回	137 回（53.5%）	66 回（25.8%）	53 回（20.7%）	50 回
１日あたり 0.93 回	１日あたり 0.78 回				

※「不対応」… 要請重複９、天候不良30、時間外10、要請基準外１

ドクターヘリの紹介

ドクターヘリとは、文字通り「ドクターが乗るヘリコプター」のことであり、一番の目的は「ドクターとナースを現場まで運ぶこと」です。ドクターとナースが現場に行くことで、初療開始までの時間が短縮されます。200km/h以上で飛行するため、県内どこへでも30分以内で到着することができます。

機内には、人工呼吸器、心電図モニター、除細動器、大動脈閉塞バルーンカテーテルを載せています。処置用のバッグ（通称：ドクターバッグ）には、気管挿管、気管切開、胸腔穿刺、静脈路確保、血糖測定ができるよう、医療器具を常備し、薬剤バッグには、昇圧剤、降圧剤、冠動脈拡張薬、抗不整脈薬、ステロイドを入れています。これらを駆使して、現場で処置を行います。

ドクターヘリの基地は本学矢巾キャンパス内にあります。待機室、格納庫、スライディングヘリパッド（ボタン一つで機体を格納庫から出すことができるヘリパッド）、夜間照明が完備しており、全国的にみても最高レベルです（右写真）。

特集　ドクターヘリ運航開始から一年を迎えて

出動の際は、あらかじめ設定されたランデブーポイントと呼ばれる場所で救急車とドクターヘリは接触します（左写真）。但し、ランデブーポイントが近くにない、現場に降りる場所がある、といった場合には現場近くの空き地、休耕田、道路上に着陸することもあります。先日は、高速道路本線上にも着陸しました。

ドクターヘリ、エンジンスタート！

フライトドクター
岩手県高度救命救急センター助教　**松本　尚也**

― 基地内にホットラインの音が響き渡る。通信指令担当（CS；communication specialist）が電話をとり、患者情報を集める。整備士は直ちに機体を格納庫から外に出す。機長は出動先と天候をチェックする。フライトドクター、フライトナースは出動準備を整えながらCSが集める情報を確認し、機体に乗り込む。この間わずか３分。要請時の情報を基に、患者さんの状態についていろいろ考えながら現場に向かうが、時には何の情報もない。現場が近づくにつれて緊張感が増してくる。着陸後、直ちに診察を開始する。ショックだが助かるかもしれない。一気に緊張の度合いが高まる。素早く処置を行い、搬送を開始する。搬送中に急変することもある。緊張の糸が緩むことはない。無事に病院まで到着したら、院内のドクターに申し送り。ようやく緊張から解放され、岩手の四季の移り変わりを空から楽しみながら帰投。―

１回の出動に要する時間は１～２時間ですが、その間は緊張の連続です。これまで、何でも揃っている院内でしか仕事をしたことがありませんでしたが、物、時間、場所、全てが整っていない環境で医療を行うことの難しさを実感しています。しかし、これまでは助からなかった方が元気に退院していく姿を見ることができるようになり、どのような困難にも立ち向かえる原動力となっています。また、ドクターヘリの出動時には、消防、県立病院、大学病院の方々にいつも助けていただいており、感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも、院内では感じることのできない緊張感と、救命のチャンスが広がるという期待感を持ちながら、出動していきます。

盛岡東警察署屋上ヘリポートにて

ドクターヘリに希望をのせて

フライトナース
岩手県高度救命救急センター主任看護師　**齊藤麻知子**

大きな期待を寄せられた岩手県ドクターヘリの導入が決定し、平成24年５月の運航開始を目標に、私たち救急センターのスタッフは、県内消防機関および県立病院との連携を図り準備を進めてきました。基地発進型のスタイルでスタートした、ヘリの運航業務にあたる医師と看護師は、毎日、７時20分に内丸を出発し始業前のブリーフィング（フライトに必要な情報の報告・確認）に臨みます。機長、整備士、運航管理者を含めた運航スタッフ全員で、

特集　ドクターヘリ運航開始から一年を迎えて

「本日も安全な運航を目指しましょう」と、気象条件等、入念に確認し機内の医療機器や備品のチェックを行い出動準備完了となります。ドクターヘリは、医師がいち早く現場に赴き、患者さんと接触し受け入れ病院との調整を図り、専門的な治療が開始されることにより、県民の命を守り後遺症の軽減につなげることができます。フライトナースは、自分が体験した事例を「矢巾日記＝看護師の交換日記？」に記しています。現場活動、搬送先の病院との連携、患者さんやご家族との関わりから学んだことや反省点など次回の搭乗に活かしてほしいことを伝えています。

岩手県ドクターヘリ業務を担当する看護スタッフのリーダーとして、運航開始のセレモニーに参加させて頂いたこと、そして空から広い県土岩手の医療を担う一翼になれたことを誇りに思っています。この一年間で病院間搬送、山間部の工事現場や高速道路での事案等々を経験し、医療チームの一員として成長させていただきました。まだ小さな一歩ですが、確かな一歩であると感じています。今後もドクターヘリ事業に寄せられた希望と医療者としての責任を果たすべく、明日の空に大きく羽ばたいていきたいと思います

おわりに（今後の課題）

現在、検討を進めている課題に「北東北三県におけるドクターヘリの広域連携運航」があります。この取り組みの趣旨は、青森・秋田・岩手の北東北三県で、県境地域を中心とした救急医療提供体制の充実や災害時における対応強化を図ることであり、現在三県で検討しております。

広域連携運航は、今年４月10日㈬から試行的に開始されております。第一例目は、８月に岩手県から秋田県ドクターヘリに対し応援要請を行いました。これを踏まえ、試行運航開始から約半年程度の期間における運航実績や課題を検証して、必要に応じて修正を加え正式運航へと展開されます。

（１）対象となるドクターヘリ
　青森県：青森県立中央病院ドクターヘリ、八戸市立市民病院ドクターヘリ（運航会社：２機とも中日本航空株式会社）
　秋田県：秋田赤十字病院ドクターヘリ（運航会社：朝日航洋株式会社）
　岩手県：岩手医科大学附属病院ドクターヘリ（運航会社：中日本航空株式会社）
（２）出動対象地域
　原則として、各基地病院のヘリポートから100km圏内とする。

理事会報告

■７月定例（７月29日開催）

１，医学部講座改編並びに組織規程等の一部改正について

内科学講座消化器・肝臓内科分野を消化器内科消化管分野と消化器内科肝臓分野に、診療科を消化器内科と肝臓内科に組織改編することに伴い、教育職員の定員に関する規程及び組織規程を一部改正

（施行年月日　平成25年８月１日）

２，教育職員の人事について

内科学講座消化器内科消化管分野　教授　松本　主之
（前 九州大学大学院医学研究院病態機能内科学准教授）

内科学講座消化器内科肝臓分野　教授　滝川　康裕
（前 特任教授）

整形外科学講座　教授　土井田　稔
（前 社会医療法人愛仁会高槻病院副院長）

生化学講座分子医化学分野　教授　古山　和道
（前 東北大学大学院医学系研究科細胞生物学講座分子生物学分野准教授）

（発令年月日　平成25年９月１日付）

３，矢巾新病院に係るエネルギーセンターの先行整備について

総合移転整備計画策定委員会より理事会に上申のあった、矢巾新病院に係るエネルギーセンターの先行整備計画について承認。整備費用については、経済産業省のスマートエネルギーシステム導入促進事業補助金を活用していくこととした。

Topics

第34回岩手医科大学市民公開講座が行われました

今年で34回目を迎える市民公開講座が、７月30日㈫から４日間にわたって矢巾キャンパスで行われました。この市民公開講座は、大学開放活動の一環として毎年行われているもので、今年度は「復興」と「こころのケア」をテーマに６講座が開講され、延べ約600名の一般市民の皆さんが受講しました。

参加者は熱心に受講され、貴重な学習の機会となったようです。

右写真：災害医学講座　眞瀬智彦教授が講師を務めた「東日本大震災・大津波での災害医療～岩手県・岩手医科大学の対応と今後の取組み～」

盛岡さんさ踊りに参加しました

日本一の太鼓パレードと称される「盛岡さんさ踊り」が８月１日㈭から４日間にわたり開催され、本学グループは初日のパレードに参加しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、パレード前に本学附属病院外来玄関前で出陣式が行われ、職員・学生が患者さんに踊りを披露しました。その後のパレードで、降りしきる雨の中、小川理事長を筆頭に200名以上の職員・学生が中央通りの約１㎞の区間を練り歩き、盛岡さんさ踊り第３番の「栄夜差踊り（えいやさおどり）」を披露し、沿道に詰め掛けた観客や大学関係者からの歓声に応えていました。

なお、本学の参加は今年で連続32回目となります。

感染対策講習会が行われました

感染対策講習会が、８月27日㈫から２回（録画映像による開催含む）にわたって歯学部棟４階講堂で行われ、職員と学生が参加しました。

講習会では、東京慈恵会医科大学附属病院感染対策室長の中澤靖先生（右写真）を講師に迎えて「慈恵での感染対策～抗菌薬適正使用を中心に～」と題した講演が行われました。

参加者は熱心に聴講し、抗菌薬の適正使用方法等について理解を深めました。

株式会社エフエム岩手と災害時等緊急放送の協力に関する協定を締結しました

本法人と㈱エフエム岩手は、大規模な災害や集団健康被害等から住民の生命、身体を守ることを目的として、災害時等緊急放送の協力に関する協定を締結しました。

この協定は、岩手県において大規模な災害や事故、事件又は重篤な感染症等の集団健康被害が発生し、又は発生する恐れがある場合において、本法人が発信する健康等に関する情報を、㈱エフエム岩手の協力を得て住民等へラジオによる情報伝達を行い、被害の予防及び軽減を図るものです。

協定締結の調印式は、８月30日㈮に本学創立60周年記念館で行われ、本法人小川彰理事長と㈱エフエム岩手村田憲正代表取締役社長（写真右）が調印を行い、堅い握手を交わしました。

お知らせ

ラジオ番組「岩手医大～いのちから～」の放送が始まります

本学の制作するラジオ番組の放送が、エフエム岩手で始まります。

この番組は、岩手医科大学の広報はもとより、県民の関心の高い健康等に関する有益な情報を発信し、地域医療の一層の充実を図ることを目的としたものです。

第１回目の放送は、小川理事長の出演を予定しています。皆様におかれましては、この機会に是非お聴きください。

（1）番 組 名　「岩手医大～いのちから～」
（2）放 送 局　エフエム岩手
（3）放送開始　平成25年10月５日㈯
（4）放送日時　毎週土曜日　12:00～12:15
（5）放送内容（予定）
　身近な病気等に関する予防や症例紹介など健康に関する情報や最先端の研究紹介、災害復興事業の活動内容の紹介など

第113回大学報編集委員会

日　　時：平成25年９月19日(木)　午後４時～午後５時

出席委員：影山　雄太、齋野　朝幸、藤本　康之、小山　薫、下山　佑、
菊池　初子、佐々木　さき子、佐々木　忠司、武藤　千恵子、

編集後記

本号の特集記事「ドクターヘリ運航開始から一年を迎えて」はいかがだったでしょうか。四国四県にも匹敵するほどの広大な面積を有する岩手県においてドクターヘリが果たすべき役割の重要性が良く理解できる記事だったのではと思います。フライトドクター、フライトナースの他、パイロットや整備士などスタッフの方々の努力には頭が下がる思いです。これまでは救命できなかったような患者さんが笑顔で退院して行く姿がスタッフの方々の励みになっているというのは素晴らしいことですね！

（編集委員　佐藤　仁）

岩手医科大学報　第444号
発行年月日　平成25年９月30日
編　　集　岩手医科大学報編集委員会
事務局　企画部　企画調整課
盛岡市内丸19 - 1
TEL 019-651-5111（内線7023）
FAX 019-624-1231
E-mail:kikaku@j.iwate-med.ac.jp
印　　刷　河北印刷㈱　盛岡市本町通2 - 8 - 7
TEL 019-623-4256
E-mail:office@kahoku-ipm.jp

すこやか
スポット歯学講座
No. 13

歯科保存学講座　歯周療法学分野
助教　村井　治

歯周病の全身への影響について

歯周病は口腔内の疾患というだけではなく全身への影響があることが、近年注目されています（図１）。循環器疾患、早産などと併せて糖尿病との関連性は特に広く知られており、歯周病は糖尿病の第６の合併症ともされています。また糖尿病患者では歯周病が悪化すると同時に、歯周病の治療により糖尿病が改善する症例も報告されています。なぜこのようなことが起きるのでしょうか？

これは歯周病が歯の支持組織である歯肉や歯槽骨を破壊する口腔局所感染症だけではなく、細菌感染や炎症による生理活性物質の供給源となる軽微な慢性の炎症巣としての側面を持っているからです。これにより歯周病の治療が全身疾患の改善につながる場合も見られます。

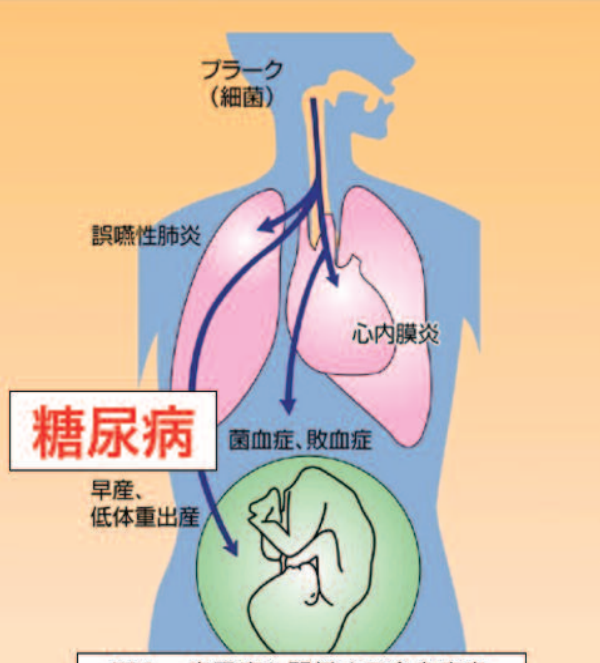

図１　歯周病と関係する全身疾患

我々は皮膚科学講座の赤坂教授のご協力を得て、掌蹠膿疱症患者の口腔内状況について精査を行いました。この結果、掌蹠膿疱症患者の多くで自覚症状の無い歯周病が発症、進行していることや、歯周病原菌に対する末梢血液中のIgG抗体価の上昇が確認されました。また歯石の除去や歯周ポケットの改善といった歯周病の治療を行う事で掌蹠膿疱症の症状が顕著に改善した症例もみられました（図２）。

図２　歯科初診時（左）と歯科治療終了時（右）の比較

歯周病は歯槽骨の吸収を伴う重度な状態となっても無症状に進行している事が多いため、日頃から注意が必要です。歯周病が進行している場合は全身に思わぬ影響がありますので、歯周病の状況確認、その予防に必要な歯石除去等も併せ、歯周病専門医の定期管理をおすすめします。